



平成 26 年 5 月 27 日

報道機関 各位

熊本大学

## 熊本大学黒髪南キャンパスで 縄文時代後期の埋葬人骨発見

### (概要説明)

今回、熊本大学黒髪南キャンパスにおける発掘調査において、遺跡から縄文時代後期前半（約4000年～3500年前）の文化層と墓がみつかりました。

- ① 遺跡から、墓とこれに伴う埋葬人骨（男性か）が発見された（写真1・2、図1）。九州で縄文時代の埋葬人骨が見つかることは珍しく、九州縄文人の復元において貴重な資料となる。
- ② 墓は土を掘って遺体を埋めた土坑墓である。隣接して川原石で囲まれた墓とみられる遺構もみつかっており、墓域が一带に広がる可能性がある。
- ③ 墓の時期は縄文時代後期前半（約4000年～3500年前）である。年代の根拠は、墓の検出された文化層から、限定的な時期の土器が出土したことによる。
- ④ 縄文時代後期の墓が洞穴や貝塚以外の平野部でみつかったのは熊本県内で初めてのことであり、九州では4例目となる。西日本の平野部では縄文時代の土坑が確認されていたが、人骨が出土しないため墓とは認定できなかった。今回、人骨が土坑に伴って発見されたため、洞穴・貝塚以外の平野部の確実な墓の存在が証明された。
- ⑤ 本調査では、これまでに出土例が少なかった縄文時代後期前葉の土器である御手洗A式古段階みたらいがまとまって出土しており、今回の発見が今後の縄文土器研究を大きく進展させる。また、摩耗が少ない大型の土器片が多量に出土することから、周囲に墓域だけではなく居住域があると推定できる。
- ⑥ 当遺跡は縄文時代後期の集落の実態解明に役立つ。このような可能性を持つ遺跡は九州でも初めてである。

### (説明)

#### 1 遺跡概要

熊本大学黒髪南キャンパスは黒髪町遺跡群に含まれ、既往の調査で弥生時代から近世までの遺物や住居などの遺構が確認されており、縄文時代についても土器や石器などが出土している。本調査では古代（奈良・平安時代）や近世（江戸時代）の遺構・遺物を調査した下位から、縄文時代後期の文化層が検出され、遺構として墓が初めて発見された（図2）。

## 2 埋葬人骨と墓について

・**人骨について** 成人（20～30代）男性と推定される人骨が、腕と膝を曲げた姿勢で、頭を西向きにして埋葬されている。人骨の保存状態はよいが、右半身の骨は動いており、頭部を含め一部破壊を受けている。九州で縄文時代の埋葬人骨が見つかることは非常に珍しく、九州縄文人の復元において貴重な資料となる（土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム：松下孝幸名誉館長による）。

・**墓の特徴と墓域** 墓は土を掘って遺体を埋めた土坑墓である。土坑は1.8m×1.2mほどの楕円形とみられ、南側は破壊されている。また、この墓に隣接して、河原石を半環状に配した墓とみられる遺構（現在調査中）が確認できており、墓域が一带に広がる可能性がある。

・**墓の時期** 人骨が検出された土層からは、縄文時代後期前葉に限定される土器が豊富に出土しており、その直上に厚い硬質砂層が堆積しているため、新しい時期の遺物の混入もない。よって、縄文時代後期の埋葬人骨であることは明らかである。追検証のため、出土した大腿骨片と、第三臼歯を用いて放射性炭素年代測定を試みたが、測定に必要なコラーゲンが内部に残存しておらず年代を出せなかった。今後、文化層で出土する炭化物などで年代測定を行いたい。

・**縄文人骨発見の意義** 九州の縄文人骨の多くは、洞穴や貝塚で発見されるが、これらは岩盤やカルシウム成分により保護されたため残ったものである。今回の人骨はそれ以外の環境で残っており大変貴重である。これまでの西日本の平野部では縄文時代の土坑が確認されていたが、人骨が出土しないため墓とは認定できなかった。今回、人骨が土坑に伴って発見されたため、洞穴・貝塚以外の平野部の確実な墓の存在が証明された。この事実は九州の縄文時代の墓域や墓制の解明につながる大きな発見である。

## 3 縄文土器研究への貢献

硬質砂層の下の文化層からは縄文時代後期前葉の出水式と御手洗A式古段階いずみ みたらいと呼ばれる連続した2つのタイプの縄文土器が出土した（写真3）。これまで御手洗A式古段階は九州内でまとまった出土例がなかったが、本遺跡からは器形や文様構成がわかる大きな土器片が見つかった。これらは今後の基準資料となり、九州における縄文時代土器研究の進展に大きく貢献できる。

出土した土器は、摩耗が少ない大型の破片を多く含んでおり、竪穴住居などの日常的居住域が周囲に存在した可能性を示す。もし居住域と墓域が隣接するならば、これまで不明瞭であった九州の縄文時代後期の集落を解明する上で極めて重要な遺跡として位置づけられる。

## 4 堆積学・地質学・鉱物学からの検討—人骨の残った理由

日本の土は火山灰由来の酸性土壌が多く、土中に埋まった骨などの有機物は溶けて残存しないとされている。しかし、本遺跡では人骨が残っていたため、その理由を明らかにするべく、土のpH測定を行った。結果、土坑墓内の土とその直上の硬質砂層は中性を示した。この硬質砂層が人骨の残存に関係している

可能性がある。硬質砂層は堆積学、地質学的見地から白川由来の洪水堆積と考えられる。この層が硬質化したメカニズムについては、現在本学教育学部、理学部ならびに熊本大学自然科学研究科附属減災型社会システム実践研究教育センターの協力を得て、地質学、堆積学、鉱物学からの分析を進めている。

●遺跡の意義 本遺跡のように居住域と墓域が一体的と想定される遺跡は九州で初めてである。本遺跡の調査が、縄文時代後期の人の形質や体格の復元、貝塚・洞穴を含めた墓制復元、九州縄文土器研究の進展、さらには縄文時代後期の集落の実態解明など様々な問題の解明につながると期待される。

(用語解説)

土坑(どこう)とは、土を掘ってつくった坑(あな)のことである。貯蔵用のものやゴミ捨て用の坑などがある。また、人を埋葬するための土坑を土坑墓(どこうぼ)という。



写真1 埋葬人骨の下顎骨



写真2 埋葬人骨(手前)と配石土坑墓(奥)

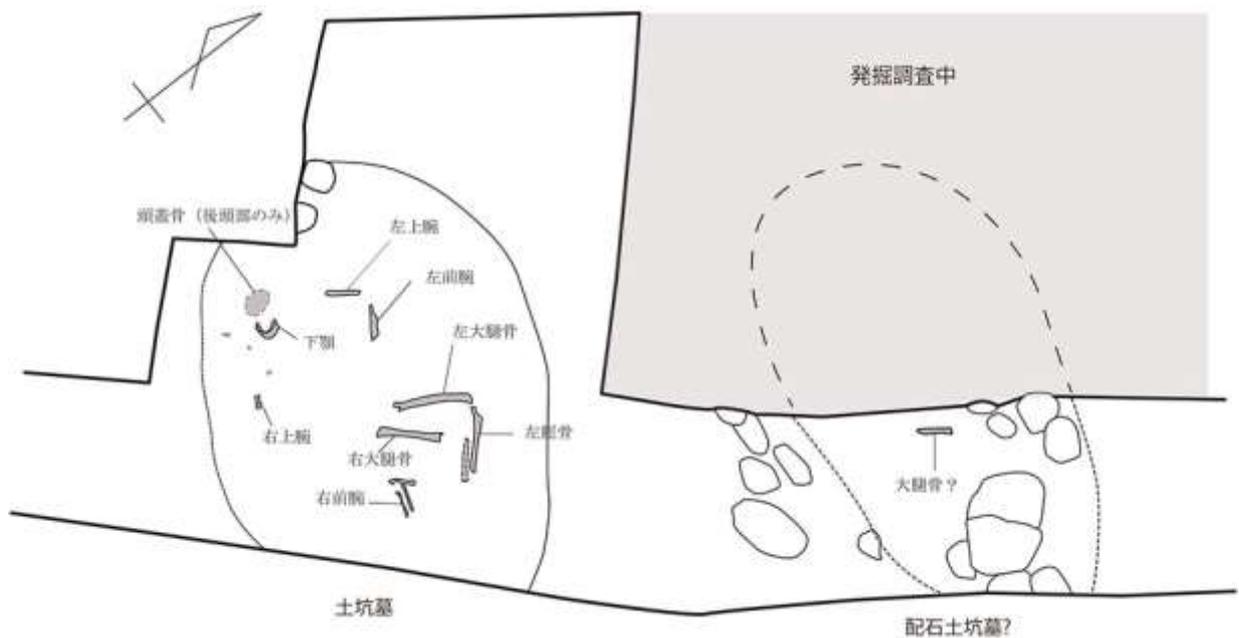


図1 埋葬人骨の出土状況



写真3 縄文後期前葉の土器



図2 埋葬人骨出土地区 基本層序

【お問い合わせ先】

熊本大学埋蔵文化財調査センター

担当：山野 ケン陽次郎

電話：096-342-3832 ※日中は発掘調査のため現場に出ていますので、できるだけ下記メールアドレスにご連絡くださいますよう、お願いいたします。

e-mail：[ken-arch@kumamoto-u.ac.jp](mailto:ken-arch@kumamoto-u.ac.jp)